



竹久夢二《立田姫》夢二郷土美術館蔵

Topics

竹久夢二展 — 描くことが生きること —

幕末に活躍した郷土の画家 鈴木鷺湖^{がこ}

語リストたちと夢を見て Wi-CAN ウィーク報告

新年のごあいさつ



伊藤若冲《旭日松鶴図》
摘水軒記念文化振興財団蔵（寄託品）

新年明けましておめでとうございます。

時の経つのはまことに早いものです。平成も19年目、21世紀に入って7年目の新しい年を迎えることになりました。毎年のことではありますが、お正月のめでたさを慶ぶと同時に、市民の皆様への美術館としてこの1年がよりいっそう親しみ深いものとなりますように努めるべく、心を新たにさせられているところです。皆様におかれましても、私たちの美術館に対しまして、これまで以上のご指導、ご協力をたまりませんよう、心からお願い申し上げます。次第であります。

私が当館の館長にお招きを受けてから、今年で9年目にはいることになります。その間、公立美術館のどこもがそうであるように、財政的な面での抑制がかかり、様々なやりくりを工夫して乗り切って参りました。その中で、

とくに感慨深く、感謝させられてきたのが、市民の方々、あるいは市外の理解者からの、好意あるご支援でした。

美術品の購入がままならない状態になっても、多くの美術愛好家、収集家の皆様から、貴重な作品の寄贈、寄託が相継いだのです。そのために美術館の収蔵作品の幅と奥行きが豊かになり、様々な特集展示が可能となってきました。

たとえば、今年初頭にかけて開かれた「サトウ画廊 1955-1981 ～若く、熱い日々～」展は、寄贈品のみによって企画、構成された特集展示です。当館の開館を目前にした16年前、東京にお住まいの佐藤友太郎氏から407点もの現代美術作品が寄贈されました。その中から意義深い作品を選びすぐって、1955年4月から1981年4月まで26年間、銀座で活動が続けた「サトウ画廊」での、文字通り「若く、熱い日々」、現代日本美術の“青春期”の息吹を再現しようとするものです。

本年以降さらに、近年ご寄託をいただいている様々なコレクションを、特集展示などでご紹介させていただく予定です。たとえば摘水軒記念文化振興財団(柏市)の伊藤若冲、岡本秋暉を含む江戸時代絵画、嬉遊会(木更津市周辺の収集家グループ)の皆様からの文人画をはじめとする江戸時代絵画、市内にお住まいの方々からの貴重な明治版画コレクションや珍しい日本近代絵画などがそれぞれです。市内はもとより千葉県内、あるいは県外からも、多くの方々に信頼を得てきた賜物が、こうした実りを結んできたものと、有り難く、また心強く思っております。

こうした有形のご援助のほか、多くの方々から無形のご助力を得て、私たち館員を常日頃励ましていただいていることにも、深く感謝されます。たとえば、講演会や演奏会など各種の催しへの参加者の数が、このところ目立って増えているように感じています。また展覧会ごとに多少の違いはありますが、ご夫婦や、ご家族揃ってのなごやかな観覧風景を目撃することも多くなりました。

そして、ボランティアさんたちの日常的なご支援には、いつも感謝させられているところです。様々な行事に積極的に参加してくださっていますが、とくにギャラリー・トークは各方面から好評を得ています。分かりやすく、親しみ深いお話の内容に、「感激しました」とわざわざ私に伝えてくださる観覧者も多いのです。その陰には日常的な学習と仲間内での切磋琢磨の努力があることを、敬意とともに承知しております。昨年秋に開催された「美術館ボランティアが選ぶ 千葉市美術館コレクション展」は、当館が誇るボランティアの皆様の質の高さ、熱意の大きさを遺憾なく示してくださいました。全国各地から視察や見学のグループが訪れたと聞いて、さこそ嬉しく、また有り難く思ったものでした。

何ごとにおいてもそうですが、当事者独りだけでは大きな成果を得ることはできません。美術館という核の周りに、千葉市当局からの理解と助言が寄せられ、市民レベルでの善意ある方々が寄り集い、さらに多くの観覧者が憩いと楽しみを得るために来館してくださる。そうした重層的な美術館の有りようがようやく軌道に乗ってきたという実感を得ている昨今です。本年が、より充実した1年になりますよう、あらためて皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます。

(館長 小林 忠)



小倉遊亀《古九谷台鉢》島コレクション（寄贈品）

◎鈴木鷺湖を知るためのキーワード

鈴木鷺湖(1816-1870)は下総国金堀(現在の船橋市金堀町)に生まれ、幕末の江戸で活躍した画家です。画業のあらましについては展示と図録をご覧くださいとして、ここでは彼の作品について知るためのキーワードをいくつかご紹介します。

「文人画」「南画」

鈴木鷺湖はおおむね「文人画」「南画」と呼ばれるジャンルの絵を描きました。「文人画」と「南画」ということばを厳密に定義するのはなかなか大変です。もともと「文人画」とは、宋時代の中国で文人(この場合は武人ではない支配者階級ということになります)が趣味として描いた絵画のことでした。その後、元時代に元末の四大家と呼ばれる黄公望、呉鎮、倪瓚、王蒙が出て、文人画に特有の画題や画風が確立しました。

一方「南画」ということばは「南宗画」の略です。「南宗画」とは明時代末期の中国で、自身が文人画家であった董其昌が使いはじめたもので、水墨を中心として筆跡を生かした、文人画によく見られるような画風を指しています。董其昌は唐時代からの中国の山水画を「北宗画」と「南宗画」に分け、主に着色で職業画家の描いた「北宗画」に対するものとして「南宗画」を定義しました。

もともと「文人画」とは書いた人の階級を示し、「南画」は画風を表していたのです。日本では江戸時代中期から、中国の文人画の画風を取り入れた日本の文人画(南画)が起こり、与謝蕪村(1716-1783)・池大雅(1723-1776, 図1)などが活躍しました。日本の文人画は職業画家が画風として取り入れて描いた、という矛盾に悩まされます。ジェイムズ・ケイヒル氏の研究を受けて佐藤康宏氏は、「日本の『文人画』は正統な文人画ではなく、中国明時代末の蘇州における、実態としては職業画家だった盛茂燦らの主題と様式を取り入れたことから、文人画でも南宗画でもなく『南画』と呼ぶのがふさわしい」とおっしゃいます。極めて正しいのですが、「南画」は、その単語を知らない場合は「南の絵って何かしら？」ということになりそうです。どちらを使っても問題は避けられません。今回の展覧会では「文人画」を主に使いますが、「南画」ということばをすでにご存知の方は同じものを指しているとお考え下さい。



(図1) 池大雅《儼山松居図》



(図2) 谷文晁《富士三保松原図》



(図3) 鈴木鷺湖《救蟻図》

鈴木鷺湖

「谷文晁」「関東文人画」

上方で興った日本の文人画を、中山高陽(1717-1780)が江戸に持ち込み、谷文晁(1763-1841, 図2)が大成しました。文晁ははじめ狩野派を学び、文人画だけでなく南蘋派、洋風画、大和絵まで様々な画風を雑食的に摂取しました。文晁は中国の画家藍瑛の作品を模写し、その画風を作品に取り込みましたが、この藍瑛自体南宗画と北宗画の画風を両方取り入れた職業画家でした。江戸を中心とした関東地方の文人画は、蕪村・大雅ら以上に中国の文人画・南宗画以外の要素が強く、区別して「関東文人画」と呼びたいとする共通点があります。ここで「南画」を使って「関東南画」とすると、東、南と方角を表す漢字が続いて落ち着きが悪いので、今回の展覧会では「関東文人画」と呼びたいと思います。

関東文人画の代表的な画家渡辺崋山(1793-1841)他多くの画家が文晁に学び、その画系から巣立ちました。近代日本における洋画の祖として知られる高橋由一(1828-1894)が学んだ吉澤雪庵(1809-1889)も谷文晁系の画家でした。鈴木鷺湖も谷文晁の孫弟子にあたります。

「つくね芋山水」

明治時代、お雇い外国人として日本美術の再評価につとめたフェノロサは、美術における日本の近代化・欧米化を唱えるなかで、文人画を芸術性が低いものとして批判しました。そのころ文人画の画風を「つくね芋の山、すりこぎの松」とひやかした記事が出て、「つくね芋山水」という呼び方があらわれました。つくね芋とはとろろ芋のことで、パターン化した山の形を指しています。例えば鈴木鷺湖の作品でいえば「救蟻図」(図3)の遠くの山などがその例でしょうか。粗製乱造気味の「つくね芋山水」の作品でも受け入れられるほど、文人画が愛好されていたということでもあります。

(学芸員 伊藤紫織)

幕末に活躍した郷土の画家 鈴木鷺湖

2007年1月20日(土)―2月25日(日)

10:00―18:00(金曜日・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

〔休館日〕 2月5日(月)

〔観覧料〕 一般 200(160)円
高校・大学生 150(120)円
小・中学生 無料

* ()内は団体30人以上の料金

*同時開催「竹久夢二」展のチケットをお持ちの方は無料

竹久夢二展

—描くことが生きること—



《秋のいこい》大正9年／紙本着色二曲一隻／夢二郷土美術館蔵

竹久夢二というと、夢見るような表情の、頼りなげに肩を落としたなよやかな女性像を思い浮かべるかたが多いことでしょう。なるほど夢二は明治期の末に妻たまきをモデルに「夢二式美人」を生みだして一世を風靡し、その後もあまたの女性たちとの交情を絵にした恋多き画家として知られています。けれども彼の生涯を広く見渡してみると、女絵だけではない、実に斬新で多彩な制作ぶりが浮かび上がって来ます。今回の展覧会は、竹久夢二(1884-1934)の画業を投稿家時代(1905-09年)から晩年(1930-34年)までの五期に分け、改めてその全体像を探ろうとするものです。出品作のいくつかにふれながら、本展の見所をご案内しましょう。

岡山県邑久郡本庄村に生まれ、1901(明治34)年に上京した夢二こと竹久茂次郎がまず筆をとったのは、艶やかな女絵ではなくコマ絵というささやかな場所でした。コマ絵とは、今のカットやイラストにあたる木版画のこと。当時創刊の続いた雑誌や新聞の余白は、画家の卵や投稿家たちのコマ絵で埋められるのが常でした。図1は日露戦争で死んだ兵士とその妻を描いた反戦的な作品。夢二のデビューは意外にも、『直言』という社会主義系の新聞紙上でした。そして約4年後、既刊のコマ絵を集めた『夢二画集 春の巻』が大ヒットし、夢二は一躍流行児となります(図2)。青春期の憧れや倦怠を当世風俗のなかに写す瑞々しいタッチが、感傷的で傷つきやすい若者たちの心を捉えたのでした。以来夢二は「印刷」という舞台から終生離れることはありませんでした。彼を支持した大衆が目していたのは1点ものの肉筆画ではなく主にこうした媒体だったわけですから、竹久夢二という作家のあり方を考える上で、これはとても重要な事実です。さらにいえば後年の、背景をあまり描き込まない速筆の日本画も、コマ絵の描法に直接つながるものです(図3)。

印刷物のジャンルでは、優美な「夢二本」の世界も本展の目玉のひとつです。夢二は画・文ともに手がけた書籍を生涯に57点制作しましたが、今回はそのほとんどを展示いたします。函や帙、表紙や見返し、扉絵や口絵、挿画に欄画…本を構成する要素のひとつひとつにまで夢二の美学が貫かれた一群は、ため息のするような美しさ。その多くには夢二が愛してやまなかった木版が贅沢に使われ、また時に大胆かつ前衛的な造形をしのばせて、見るものを驚かせます(図4)。



(図1)



(図3)



(図2)



(図4)



1冊の本を総合的にとらえたように、夢二は個々の作品を超えて、暮らしをまるごと演出したいと考えました。1914（大正3）年には日本橋区呉服町に「港屋」を開き、自身がデザインした手仕事による生活雑貨を置いています。図5は店の宣伝を兼ねた木版画。右端には店頭を飾った提灯を背に、ハイカラな出立ちの夢二がいます。港屋はわずか数年で閉じることになりますが、生活デザインの夢は断ちがたく、後年の「どんたく図案社」や「榛名山美術研究所」へと続いてゆきます。夢二がデザインした千代紙や封筒、手拭や浴衣地など、今見ても新しい日用品の数々は、展示の随所でご覧いただけるはずです（図6）。

夢二はブランドショップを経営して時代を先駆けるかと思えば、江戸期の人情噺や南蛮紅毛のテーマに心寄せる人でもありました(図7)。近代都市へと変貌し、人の心も変えつつあった東京での暮らしに、「ここではないどこか」を求める気持ちをかきたてられたのでしょう。夢二は浄瑠璃や歌舞伎に取材した作品を数多く残しましたし、また江戸の面影を求めて、かつての旅絵師のように放浪を続けたのです。

そして何よりも、夢二は抒情の人でした。彼にとって制作とは、何らかの形を写すよりもむしろ、文字通り情を抒するというものでした。彼がしばしば描いた身も世もなく嘆く女や不安を隠しきれずに立ちすくむ女、あるいは寄り辺ない身の上を占いに託する女は、画家自身の心の投影でもあったのです(図 8-10)。己の感情を赤裸々に描き、文字に綴る姿勢はそれまでにない新しいものでした。それは大衆の共感を呼ぶとともに、あとに続く若い芸術家たちにも道を示しました。そしてこの「抒情」こそが、今なお夢二人気が衰えない最大の理由でしょう。夢二の絵を見るとき私たちは、形を愛でるだけではなく、画面にあふれる情感をも共有しているのです。

竹久夢二は抒情の人であったゆえに愛され、批判にもさらされました。晩年はスキャンダルにまみれ、信州富士見高原療養所で
の死は寂しいものでした。けれども芸術家としての自由を固守し、
画壇や美術団体に群れることなく孤高の存在を貫きました。仕事
ぶりは多作で実に多彩、それでいてすべてが紛れもなく夢二調と
いう存在は、誰にも似ていない稀有なものです。展示は原稿や、
パイプ・万年筆などの遺愛品も含み、約 350 点という規模で画業
を通覧いたします。この機会にぜひ、新たな夢二像を発見してく
ださい。

(学芸員 西山純子)

- 図1 『直言』2巻20号より／明治38年／印刷／法政大学大原社会問題研究所蔵
- 図2 『夢二画集 春の巻』より／明治42年／印刷／当館蔵
- 図3 《淀の乗合船》明治末～大正初期／紙本淡彩一幅／夢二郷土美術館蔵
- 図4 『三味線草』帙／大正4年／書籍／静岡市蔵
- 図5 《港屋絵草紙店》／大正3年／木版多色摺／当館蔵
- 図6 《千代紙 いちご》／大正3～4年／木版多色摺／個人蔵
- 図7 《時雨の炬燵・小春》／大正7年／絹本着色双幅／静岡市蔵
- 図8 《待てど暮らせど来ぬ人を》／大正11年／絹本着色一幅／個人蔵
- 図9 《白夜》／大正11年頃／絹本着色一幅／夢二郷土美術館蔵
- 図10 《トランプをする娘》／昭和初期／絹本着色一幅／夢二郷土美術館蔵

竹久夢二展 ―描くことが生きること―

2007年1月20日(土)ー2月25日(日)
10:00ー18:00 (金曜日・土曜日は20:00まで)
*入場受付は閉館の30分前まで
[休館日] 2月5日(月)
[観覧料] 一般 800 (640)
高校・大学生 560 (450)
小・中 学 生 無料
*()内は団体30人以上の料金

語リストたちと夢を見て

～ Wi-CAN ウィーク(11/23 ㊟㊟ — 12/3 ㊟) 報告

美術館と栄町を結ぶ賑やかなパレードを皮切りに、講演や展示、パフォーマンス、映像上映、対談、公開ゼミといった様々なかたちでイベントが展開された Wi-CAN ウィークでした。

その一環として市内中央地区を主な舞台に展開された企画「語リストたちは午後夢をみる」は、Wi-CAN の担い手となる千葉大生たちと、美術家・岩井成昭さんとの出会いにさかのぼります。これまで地域に取材したプロジェクトを数多く手がけてこられた岩井さんが今回注目したのは、千葉という土地と「帰属意識」の問題でした。千葉を除く国内各地から集まった9人の学生が、それぞれが帰属する故郷の一部分を「夢」というかたちで、ここ仮住の地に持ち込むことで、それらを受けとめる側の人々もまた、自らの帰属意識に目を向ける機会を得ることを願って。

限られた時間の中で9つの「夢」を実現させるために、これまで以上に広く地域の方々に協力をお願いすることとなりました。企画を説明させていただく中で、あらためて感じたのは、「アート」があたりまえのように存在するのは美術館の中だけだということ。「アート」という言葉をなるべく使わずに「アート・プロジェクト」の意図を伝える努力が求められます。もし「夢」が実現できないならば、その理由を考えてみることで、困難も含めて、まわりの人々との交渉や衝突、歩み寄りなど、実現過程にこそこのような企画のおもしろさがあるともいえます。美術館の中に行くと、地域と時間を超えたモノに向き合うことが多い反面、きわめてローカルな視点が求められることもあります。それは、地域を越えた歴史の集積(=コレクション)からなる美術館が、目の前にある同時代の地域社会の中にどのような役割をもちうるか、という問題とも無関係ではありません。

参加した9人の学生たちは、いずれ千葉を離れるときに、それぞれの向かう(または帰る)先で、千葉を伝える親善大使となることが期待されています。このことは同時に、私たちが毎年、様々な地域から「親善大使」を受け入れているということを思い出させます。会期終了後に実現された夢も含めて、今回のプロジェクトは記録映像作品という形で私たちのもとに残されます。これらの「夢」が投げかける問いは、外部者のまなざしを借りて千葉をとらえなおすための触媒(カタリスト)として、これからも私たちのコミュニティに作用し続けることになります。

今後、Wi-CANP での活動は3月4日まで続きます。1月20日より、ウィーク中のイベントを含む、今年度の活動を振り返るドキュメント展示を開催します。ぜひお立ち寄り下さい。

詳細は、千葉アートネットワーク・プロジェクト実行委員会事務局まで。

080-3493-8774 / <http://www.wican.org/2006/> / mail@wican.org

☆イベントスケジュール等を事前にご確認の上、ご来場ください。

(学芸員 山根佳奈)

上から

〈灰は知る〉より

〈消雪パイプに内在する共同体の潜在意識〉より

〈ピーナツ☆ワイド〉より、撮影風景



美術館ボランティアが選ぶ 千葉市美術館展コレクション展 お客様が選んだ作品ベスト 10

2006年10月17日から12月3日に開催された「美術館ボランティアが選ぶ 千葉市美術館コレクション展」関連企画として、「お客様による人気投票」を実施しました。8階展示室出口に投票スペースを設け、展覧会を見終わったお客様に、印象に残った、あるいは気に入った作品を3点選んでいただきました。326名のお客様の投票を集計した最終結果から、上位10作品をここに発表させていただきます。

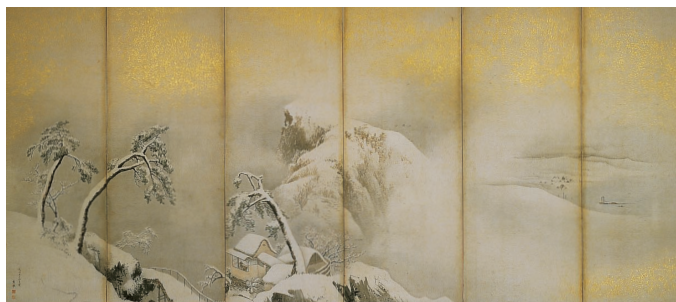
当館の看板作品ともいべき喜多川歌麿《納涼美人図》をおさえ、円山応挙の《秋月雪峽図》が栄えある1位に輝きました。また、葛飾北斎《富嶽三十六景 凱風快晴》、棟方志功《二菩薩釈迦十大弟子》など、人気作家による知名度の高い作品が上位を占めています。同時に開催された展覧会が「浦上玉堂展」だったこともあり、ベスト10の大半を江戸時代の作品が占める結果となりました。

投票いただいた皆様には、この場を借りて御礼申し上げます。ご協力ありがとうございました。



喜多川歌麿《納涼美人図》は2位に

順位	作品名	作者名	展示 No.	得票
第1位	秋月雪峽図	円山応挙	43	114票
第2位	納涼美人図	喜多川歌麿	29	88票
第3位	薫風	鏑木清方	42	74票
第4位	富嶽三十六景 凱風快晴	葛飾北斎	44	55票
第5位	二菩薩釈迦十大弟子	棟方志功	55	53票
第6位	刻	関主税	57	43票
第7位	老子図	酒井抱一	36	42票
第8位	東海道五拾三之次内庄野	歌川広重	45	41票
第9位	白梅図	中村芳中	54	37票
第10位	19と1つのさくらんぼ	浜口陽三	20	33票



1位に輝いた円山応挙《秋月雪峽図》

ボランティア日和 episode11

その日の朝はとても緊張していました。2006年7月22日から8月27日に開催された「イギリスの美しい本」展の関連プログラムとして企画された「本をつくらう」のワークショップの日のことです。

たくさんの人に来てもらえるだろうか？だれも来てくれなかったらどうしよう・・・

ところが、私の心配は見事に裏切られ、早くからたくさんの方が列を作って下さり、受付は予定していた時間よりも早くから始める事になりました。予定定員を超えましたが、来て下さった方には出来るだけ参加していただきたく、作業机を急遽増やすことになりました。道具の数が十分ではなかったので、順番に回して使ってもらわなくていけませんでしたが、限られた制作時間の中で、皆さんの作業がスムーズに進められるか心配でした。

しかし、制作が進むうちに、ワークショップの不思議な魅力を発見しました。先にできた人が隣の人をサポートしていたり、道具を譲り合ったりと、最初は知らない同士で言葉を掛け合うこともなかった人たちでしたが、次第に打ち解け合って、自然に助け合う雰囲気になっていたのです。短時間でそうなれるのは、ワー

クショップならではのかもしれません。

お帰りの際、自作の本を手にも、ありがとうと声をかけて下さるたびに、私には熱いものがこみ上げてきて、こちらこそ感謝の気持ちでいっぱいになったものです。この日のことは、決して忘れられないとてもいい経験になりました。

千葉市美術館にボランティアが結成されてから3年半が過ぎ、活動の幅も広がってきました。「ギャラリートーク」や「鑑賞リーダー」はボランティアの活動として定着してきました。モノづくりや体験を通して作品理解を深めようとする「ワークショップ」や、「アウトリーチ・プログラム」などは、さらなる今後の展開が楽しみな分野です。ボランティア発信の企画としては取り組み始めたばかりですが、きっと、地域や市民のみなさまに美術館をより身近に感じていただけることにつながるものと思います。

どうぞ、これからも、赤いストラップの美術館ボランティアの活動にご期待ください。

(美術館ボランティア 望田一美)

□「浦上玉堂展」七絃琴コンサート開催



展示室での演奏

昨秋の特別展「浦上玉堂」では、玉堂が愛した「七絃琴」の世界に触れていた
 だべく、現代の琴士・坂田進一氏による七絃琴コンサート「浦上玉堂余響
 ～『玉堂琴譜』を中心に」を11月12日(日)に開催しました。1階さや堂ホー
 ルの大きな空間で、150名近くのお客様がその微かな音色に一心に耳を傾け
 てくださいました。また、11月12日と最終日の12月3日に計3回、展示
 室内において玉堂の絵を背景に、2～3曲ずつの七絃琴の演奏も特別に行い
 ました。作品と一人静かに対峙する方が殊に多く見受けられた本展の会場で、
 目ばかりか耳の神経も研ぎ澄まして堪能、至福のひとつときとご好評をいただ
 きました。

□アンティーク着物によるファッションショー「夢♡コレ」モデル募集中！

竹久夢二が一世を風靡した時代の着こなしをショー形式で
ご覧いただきます。

2月10日(土) 15:00～・16:00～の2回開催(内容は同じ)

11 階講堂にて／各回先着 80 名／観覧無料

コーディネイトおよび解説：大野らふ(Ponia-pon 代表)

このイベントにモデルとして参加してくださる方 10 名を大募集！

* 15 歳以上の女性を対象。♂切は 1 / 26 消印有効。

*募集要項の詳細はホームページをご覧ください

☎ 千葉市美術館 043-221-2311 までお問い合わせください。

千葉市美術館「友の会」会員募集

□ 会員の特典

- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズが10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 11階「かぼちゃワイン」での飲食代が、5%割引になります。
- 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。

☐ 会費

	一般会員	学生会員 (大学・専門・高校)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000 円	500 円	2,000 円
年会費	2,000 円	1,000 円	4,000 円

入会の申し込みは美術館受付にて。(郵便振替でも申し込み可)

〈問い合わせ先〉 ☎ 千葉市美術館 043-221-2311

市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度は近世から現代まで、さまざまな時代のアーティストたちについて当館スタッフが毎回分かりやすく解説します。

□第9回 2月24日(土)

「鈴木鷺湖 — 幕末の郷土の画家 —」

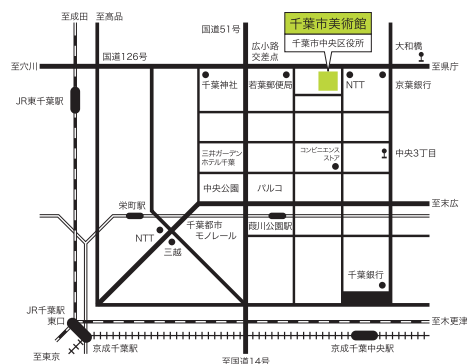
講師：伊藤紫織(本館学芸員)

□第10回 3月31日(土)

「鳥居清長 — 天明のビーナス、江戸を歩く —」

講師：浅野秀剛(本館学芸課長)

いずれも 14:00 ~ / 11 階講堂にて / 先着 150 名 / 聴講無料



| 交通案内 |

- ◎ JR 千葉駅東口より徒歩約 15 分
 - ・千葉都市モノレール県庁前方面行「葎川公園駅」下車徒歩5分
 - ・バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分
- ◎ 京成千葉中央駅東口より徒歩約 10 分
- ◎ 東京方面から車では京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ 貝塚 IC 下車国道 51 号を千葉市街方面へ約 3km 広小路交差点近く
- ◎ 地下に駐車場があります

【編集・発行】千葉市美術館

〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8

TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316

Chiba City Museum of Art

3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 Japan

<http://www.ccma-net.jp>

【発行日】2007年1月20日

【印刷】半七写真印刷工業株式会社